

龍谷大学図書館蔵『玄奘三藏渡天由來縁起』翻刻（一）附解題

田 中 智 行

解題

一 概要

龍谷大学図書館に蔵される『玄奘三藏渡天由來縁起』（写本一冊）は、中国の小説『西遊記』に題材をとった浄土真宗の説教台本である。

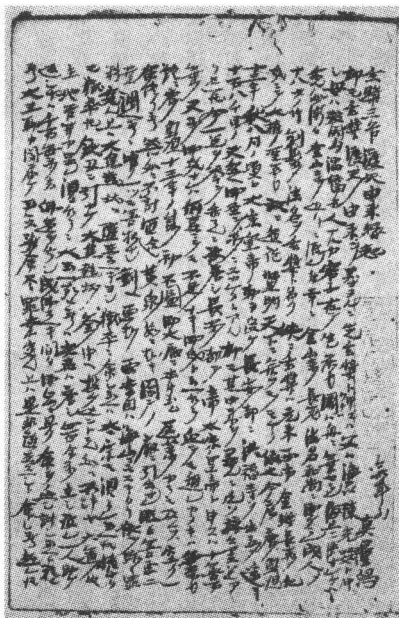
本書が西遊記物語を題材としたものであることを初めて報告したのは、太田辰夫氏が一九六七年に発表した「《玄奘三藏渡天由來縁起》と《西遊記》の一古本」と題する論文である〔1〕。この論文はのちに、僅かに修正を施されて太田氏の著書『西遊記の研究』〔2〕に収められた（以下、特に断らない限り太田論文の引用は同書による）。太田氏は、本書に見られる西遊記物語が世に知られる『西遊記』と食い違う点が多いことを指摘し、『西遊記』と比較して本書の物語が拙いことなどから、本書が基づいた原本が「從來知られていない西遊記の一異本であろうし、おそらくその異本は、現存する明本西遊記よりも古いのではないかと想像される」と述べている。

太田氏の論文の三年後に公開された著書のなかでダドブリッジ氏は、本書を実見してはいないと断りつつ、太田氏が、物語の相違が本書作者の改編によるのではなく原本に由来することや、物語の巧拙により時代的先後を判断できることを議論の前提にしていると述べ（大意）、太田氏の立論を問題にしている〔3〕。しかしそれ以降、本書が学界から大きな注目を浴びてきたとは言い難く、太田氏の所説を実証的に再検討した研究は久しくなされることがなかった。

本書は一九九九年に奈良県立美術館、山口県立美術館、東京都美術館にて開催された「西遊記のシルクロード 三藏法師の道」展に出品された。この展覧会の図録には本書巻頭のカラー写真が掲載され、中野美代子氏による列品解説が附されている〔4〕。

以下に本書の体裁を述べる。本書は縦二四・〇センチ、横一七・五センチ、現状では空押で蓮華唐草文があしらわれた濃藍色の表紙が前後につけられた線装本で、四ヶ所に穴をあけて全九十八丁が綴じられている。序跋の類はなく、年月も示されて

『玄奘三蔵渡天由来縁起』(三丁才)



いない。表紙左肩には「玄奘三蔵渡天由来縁起」と記された題簽がある。一丁才(扉)に「玄渡記 上 和浄 真量」とあり、一丁才と二丁両半葉は空白。三丁才の第一行に「玄奘三蔵渡天由来縁起 無耳山 真量写」とあつて第二行から本文が始まる。本文は半葉十八行で記され、段落(後述)が変わつてもまったく改行をせずに書き連ねられて、九七丁才に至つて終わる。九八丁才は空白で、九八丁才は内容的には本文と直接関わりなく、親鸞の生涯が七五調で描かれている。

一丁才にみえる「玄渡記 上 和浄 真量」という文字について、本書は百回本西遊記でいえば第四十四〜四十六回到相当

する車遅国の段で終わっているため、「上」の他に「下」があつたことも考えられるが、いまのところ存在は確認されていない。三丁才の「無耳山」について太田氏は、奈良県橿原市山之坊町にある阿弥陀寺(現在、真宗本願寺派)の山号を指すものではないかと述べている。天理図書館蔵『阿弥陀寺略縁記』(寛政六年=一七九四、釈恭順写)〔5〕によれば、阿弥陀寺は暦応二年(一三三九)に耳成山の北麓に一字を建立し耳無山山坊阿弥陀寺と号した。天正十六年(一五八八)に焼失し、場所をうつして真宗の道場となり今日に至るといふ。現在の所在地は耳成山の東にあたる。「耳成」という地名は、古くは「無耳」と書かれることもあつたといふ〔6〕。真量という僧については詳しいことが分らない。

本書は○印で段落に区切られ、全五十一段から成る。○印の中には漢数字で二から十二までの番号が付される場合があるが、漢数字の書かれていない○印も多い。下に引用するのは、太田氏が新たに通し番号を施し、各段落の物語内容、ならびに明本西遊記においてその物語が配される回数を示したものである(原文は○に洋数字で通し番号を示す)。

- | | | |
|---------|----------|--------|
| (1) | 本書(段・内容) | 西遊記(回) |
| (1) (2) | 玄奘の生い立ち | (十二) |
| (3) (4) | 太宗の地獄めぐり | 十一 |
| | 熊山君 | 十三 |

(45)	(40)	(38)	(34)	(29)	(28)	(27)	(23)	(21)	(20)	(18)	(16)	(15)	(14)	(14)	(13)	(6)	(5)
(51)	(44)	(39)	(37)	(33)			(26)	(22)		(19)	(17)	(16)				(13)	
孫悟空を収む	孫悟空の生い立ち	六賊にあう	観音より金箍呪を授かる	烏巢禪師より心経を授かる	猪八戒を収む(高老荘)	黒風怪	黄風怪	沙悟浄を収む	禅心を試みらる	人参果	蛇蝎に焼かれる	白虎嶺	黄袍怪	金角銀角	烏鶏国	紅孩子	車遅国
十四	一〇八	十四	十四	十九	十八・十九	十六・十七	二十・二十一	二十二	二十三	二十四・二十六	(十六)	二十七	二十八・三十一	三十二・三十五	三十六・三十九	四十・四十二	四十四・四十六

一 目して明らかなように、現在知られる『西遊記』が孫悟空の誕生から始まっているのに対し、本書は玄奘の生い立ちを導入としており、話の順が異なっている。太田氏も述べるように、これは本書において玄奘が中心人物として扱われていることを

あらわしている。また、(14)から(17)にかけての「心経↓猪八戒↓黒風怪」という物語順が、『西遊記』では「黒風怪↓猪八戒↓心経」になっている点も、太田氏が指摘する通りである。

本書は説教台本の体裁をとるため、各段落の末尾には説教の一節がある〔7〕。たとえば〔2〕では玄奘の出発の経緯を述べた後、玄奘の取経の困難さや旅路の長さを述べて、それを思えば説法をおろそかに聞くことは許されないと説かれる。また(10)の末尾、孫悟空が蟠桃大会（この名称は本書の訳文にあらわれないが）に潜り込む場面では、孫悟空が酒を飲み過ぎたせいで逃走しようとするところを簡単に捉えられてしまう——本書では『西遊記』とは異なるこのような展開になっている——場面に続いて、酒を戒める説教がなされる。

二 『通俗西遊記』、『絵本西遊記』との関わり

『西遊記』の現存する最も早い版本は明・万曆二十年に金陵の世徳堂から刊行された『新刻出像官板大字西遊記』二十巻百回である。太田氏は世徳堂刊本以降の『西遊記』と本書（以下『縁起』）とを比較して、物語の配列や筋の異なる部分において『縁起』のほうが単純、平凡であることなどを根拠として、「本書の原本が世本（世徳堂刊本——引用者注）などよりも古い系統に属するものであることは疑いない」と述べた。太田氏はまた「この『縁起』が基づいた——引用者注）古本は明初頃のも

のと推測するのが妥当であろう」としている。

たしかに『縁起』の物語の筋立ては、世徳堂刊本以降の『西遊記』と懸け離れている個所も多く、その多くが物語の洗練度において『西遊記』に劣るように感じられるのは否定しがたい。しかしながら、結論を先に記すなら、本書は先行する翻訳された『西遊記』の訳文を部分的ながら明らかに踏襲している。それらの翻訳はいずれも、現在知られる形に整えられて以降の『西遊記』に基づいたものであるから、少なくとも、『縁起』のすべての筋立てが世徳堂刊本より古い西遊記物語を反映していると考えることはできない。

実は『縁起』が既存の翻訳に依拠している可能性については、既に太田氏が、一般的にいうならばこの説教台本が「既有的の翻訳を仲介として間接的に作られた可能性が大である」ことを述べている。太田氏は「しかし、このような内容を持つ翻訳は、その存在が全く知られていない」と続けて、江戸期に出た翻訳である『通俗西遊記』、『画本西遊全伝』（『絵本西遊記』ともいう）の書名を挙げた上で「要するに翻訳は以上の二種で、話の内容に大きな差異はない。してみれば、この説教台本が上述の翻訳に拠ったものでないことは確実である」と結論づけている。

しかし意外なことに、『縁起』は細部において、まさに太田氏が挙げた両書の訳文から明らかに影響を受けている。以下、具体的に論証していくが、その前に『通俗西遊記』と『絵本西遊

記』——以下本稿ではこの書名に統一する——につき概略を述べておく（両書については既に磯部彰氏の詳細な研究があり、以下の記述も多くを負っている）¹⁸⁾。

我が国における現存する最も早い『西遊記』の翻訳は『通俗西遊記』と題される。同書はまず口木山人（西田維則）の訳により初編が刊行され、西田氏の没後、訳者をかえながら後編（石磨呂山人訳）、三編（同）、四編（尾形貞斎訳）、五編（岳亭丘山訳）と続刊され、全百回となるべきところ第六十五回まで刊行されて未完と終わつた。以下に各編の刊行年（奥附による）と、それぞれにおさめられる回数とを記す。

初編 宝暦八年（一七五八） 第一回～第二十六回
後編 天明四年（一七八四） 第二十七回～第三十九回
三編 天明六年（一七八六） 第四十回～第四十七回
四編 寛政十一年（一七九九） 第四十八回～第五十三回
五編 天保二年（一八三二） 第五十四回～第六十五回

一方、我が国で初めて完結した『西遊記』の翻訳となったのが『絵本西遊記』である。同じく刊行年（序の日付による）と収録範囲とを示す。

初編 文化三年（一八〇六） 第一回～第二十九回前半
二編 文政十年（一八二七） 第二十九回後半～第五十三回
三編 天保四年（一八三三） 第五十四回～第七十九回
四編 天保六年（一八三五） 第八十回～第百回

このうち『縁起』と物語が重なるのは初編と二編である。

『絵本西遊記』初編は口木山人訳、吉田武然校と称するが、磯部氏によれば実際には法橋玉山（石田尚友）による改訳本といふべきもので、『通俗西遊記』に大省略を加えて流暢な言葉に置き換えたものであるという。二編の訳者は山珪士信（山田圭蔵）。三編と四編の訳者は『通俗西遊記』五編とおなじ岳亭丘山で、未完に終わった『通俗西遊記』の訳業を『絵本西遊記』によつて実質的に継承し完成させた。

『通俗西遊記』と『絵本西遊記』の訳文は似ている場合も多いため、『縁起』がいずれの訳文を踏襲しているのかを検討するには、両書において訳が異なる部分を『縁起』の該当箇所と照合する必要がある。結論を先に記すならば、『縁起』と明らかな文字の一致が見られて、訳文の踏襲を排他的に確認できるのは、『絵本西遊記』初編と、『通俗西遊記』後編ならびに三編である。従つて、この三者のうち最も新しい『絵本西遊記』初編の刊行された文化三年（一八〇六）をもつて、『縁起』の成立年代の上限とすることができであろう。

以下、具体的に『縁起』と『絵本西遊記』（以下『絵本』と略称）また『通俗西遊記』（『通俗』）との文字の一致を例証する。

（一）『絵本西遊記』初編

まず『絵本』初編と『縁起』について見る。以下に引用するのは、百回本『西遊記』では第十八回に相当する場面で、猪八

戒が自らの妻（実は孫悟空が化けている）に語るセリフである。

我此^{われこの}家の茶^{いへちやめし}飯^{めし}を吃^{くら}ふといへども、又田^{またでん}畠^{ばた}を耕^{たがや}し家業^{かぎふ}の事^{こと}をおこたらず、儼^{なんぢ}が衣服^{いふく}食^{しょく}用^{よう}に至^{いた}るまで皆^{みな}我^{われ}設^{なづ}け^{まふ}て事^{こと}足^{たり}れり。其餘^{そのよなんぢ}儼^{なんぢ}が心^{こころ}にかなはざるは何^{なに}に事^{こと}ぞやと問^とふ。（『絵本』初編巻七【9】）

我僅^{われ}二此屋^{この}ノ茶飯^{ちやめし}ヲ喰^{くら}フト云^いヘトモ、毎日^{まいにち}ノ入情^{にゅうじやう}ニ田畠^{でんぱち}ヲ耕^{たが}ヘシ家業^{かぎふ}怠^たラス、汝^{なんぢ}カ衣服^{いふく}食^{しょく}食用^{じようよう}ニ至^{いた}ルマテ皆^{みな}我^{われ}設^{なづ}ケニテ事^{こと}足^{たり}レリ、其外^{そのほか}其方^{そのかた}力^{りき}心^{こころ}ニ叶^{かな}ハヌコトハ何^{なん}ソヨト。（『縁起』二五丁オ）

全体によく似ているが、特に「汝カ衣服食用ニ至ルマテ皆我設ケニテ事足レリ」という個所がまったく同一といつてよい。この個所については『絵本』に先行して『通俗』の翻訳も存在し、『絵本』はおそらく『通俗』の訳文を参照しているのであるが、『通俗』では「你ガ衣服^{いふく}食^{しょく}食用^{じようよう}ニイタルマデ都^{すべ}テ是^{これ}我^{われ}ハタラキナリ」と訳されており【10】、『縁起』は『絵本』初編と一致する。なお『通俗』の依拠した原文は「如今你身上穿戴的、四時花果、八節蔬菜、都是我掙來的（いまお前が身につけているものや、四季ごとの花や果物、八節ごとの野菜は、全部俺が稼いできたものだぞ）」の如きものであったと思われる、「衣服食用」という文字はない【11】。

もう二例を、ともに人參果の段から挙げる。

まず『縁起』（四十丁オ）に、五莊観の「宮殿ノ扉」にかかる

対聯のことを以下のように記す。「與天同壽道家トアリ右ニアリ、左ノ方ニハ長生不死神仙府トアリ……」ところがこの対聯は原作では前後が逆で「長生不老神仙府、與天同壽道家」でなければならぬ（第二十四回）。『通俗』『絵本』ともこの対聯の文字について本文では記さないものの、『絵本』の挿画には対聯の文字が記され、向かって右に「與天同壽道家」左に「長生不老神仙府」という配置になっている（12）。『縁起』の記述は、この挿画に基づいている可能性が高い（「不老」と「不死」で字も異なっているが、これは『縁起』の単純な誤写であろう）。

次に、少し後にみえる、人參果が五行を忌むことについての解説をみる。原作では「遇金而落、遇木而枯、遇水而化、遇火而焦、遇土而入」となっている。最後の「遇土而入」を『通俗』は「土ニアヒテ入リ」と訳すのに対し、『絵本』は「土にあふて沈^レム」とする。『縁起』は「土ニ於テ沈ム」であり、『絵本』と『縁起』とが一致する。

この他、細部において『縁起』が『絵本』とのみ一致をみせる点は少なくない。幾つか挙げるなら、須菩提祖師が孫悟空に傍門を授けようとする場面がないこと（『縁起』十丁ウ、『絵本』初編卷一）、劉伯欽（13）の家に三蔵が一泊しからないこと（『通俗』や原作では二泊する——こと（『縁起』七丁オ、『絵本』初編卷五）、劉伯欽が両界山（五行山）の由来を語る際に王莽の名を出さないこと（『縁起』七丁ウ、『絵本』初編卷

五）、四聖試禪の場面で猪八戒が目隠し鬼の要領で「嫁とり」をする際の描写（『縁起』三九丁オ、『絵本』初編卷九）などは、何れも『縁起』が『絵本』初編と一致し、なおかつ『通俗』や原作とは一致しない例である。また『縁起』（三二丁オ）は『通俗』第二十一回で省略されている護法伽藍の頌を引いているが、これは『絵本』が新たに原作から引いて付け加えた個所で、『絵本』初編卷八に見出すことができる。

（2）『通俗西遊記』後編、三編

物語が『絵本』で二編に収録される部分に入ると、『縁起』の訳文は『絵本』二編ではなく『通俗』後編や三編と一致を見せるようになる。『通俗』後編、三編との一致をそれぞれ一例ずつ示す。

『通俗』後編第三十三回、孫悟空は銀角の落とした三つの山の下敷になるが、土地神や山神のおかげで脱出する。そうとは知らぬ金角銀角の手下の妖怪二人が、孫悟空を魔法の道具に盛り込もうと道を行くところに、道士の姿に化けた孫悟空が声を掛け、どこへ行くのかと尋ねる。孫悟空を捕えに行くところだとの返答を得た道士（孫悟空）が妖怪二人に答えて言うセリフを、『縁起』の該当箇所と対照させてみる。

彼^カ孫行者ハ神^カ通廣^{ハツタウ}大ニシラ天ニ騰^{ノボ}リ地ヲ鑽^カルノ手段^{ダテ}アリトキ、ヌルニ……（『通俗』第三十三回）

否ヤ其孫ト云ハ兼テ聞コトアリ、神道廣大ニシテ天ニ騰^カ

リ地ニ鑽^{カサ}、ノ手段アリト聞ク。『縁起』六三丁ウ)

『絵本』二編卷二では、ここは「那孫行^{ナソウギョウ}者は神^{カミ}通^{ツウ}廣大^{クワイド}なりと聞^クつるに^ニ」となっており、「天に騰^{トウ}り地を鑽^{カサ}る」の文字がない。なおかつ、『通俗』後編や三編が依拠したテキストといわれる十卷本『西遊真詮』では、ここは「那孫行者十分無禮、我也惱他^ニ」(あの孫行者はまったく無礼なやつ、わしも奴には腹を立てておる)となっており、まったく表現が異なっている。『通俗』の訳文が何か別に由来を持つのか、あるいは訳者(石麿呂山人)による改編であるのかという問題は残るが、『縁起』に関する限り、この個所の文字が『通俗』に由来していることは間違いないであろう。

次に『通俗』三編第四十六回、車遲国にて孫悟空は、国王に敬愛されている三人の道士(実は妖怪)と法術を闘わせる。高く積み上げた机の上で座禅を組むという勝負に敗れた兄弟子を庇^{カサ}つて鹿力大仙が言うセリフを、やはり『縁起』の該当個所と対照させてみる。

陛下^{カハ}、我ガ師兄^{シシヤウ}原^{ハツ}ヨリ強ク風疾^{フウシツ}アリ、是レニヨツテ高キ處^{トコロ}ニ到ル時^{トキ}ハ天^{テン}風^{フウ}ニ冒サレテ舊^{キウ}疾^{シツ}ヲ發ス、故^コニ和尚勝^{シヤウシヤウ}ヲ得タリ。『通俗』第四十六回)

師兄虎力仙ハ強ク風疾アリテ、高キ處ニ至ルトキハ天風ニ犯カサレテ舊病ヲ発スルユ和尚勝ヲ得タリ。『縁起』九

二丁オ)

十卷本『西遊真詮』のこの個所は「陛下、我師兄原有強風疾、因到了高處、冒了天風、舊疾舉發、故令和尙得勝(陛下、我が師兄はもととひどい中風を抱えておりまして、それが高所に至り天風にさらされたものですから旧病の発作をおこし、それと和尚を勝たせてしまったのです)、また『絵本』は「我師兄頃日風疾たり、是に依て高き所に到る時は天風に冒されておもはず唐僧に負たり」(二編卷六)となっている。『通俗』と『縁起』とは、互いに無関係に同じ文章を翻訳してそうなるとは考えられないほど近似しており、対して『絵本』とは距離がある。『縁起』が『通俗』の訳文を踏襲していると考えるのが自然である。

以上述べたように『縁起』は、『絵本』初編ならびに『通俗』二編、三編の訳文を直接あるいは間接に踏襲している。既に述べたように、『絵本』初編は百回本『西遊記』の第二十九回前半までに相当し、『通俗』二編は第二十七回から始まるから、『通俗』初編を参照せずとも、『絵本』初編と『通俗』二編があれば、断絶なく物語を続けることができる。なお、第二十七回から第二十九回途中までについては、『縁起』は二種類の先行訳を参照できたはずであるが、この範囲に関して『縁起』との一致が見出されるのはもっぱら『絵本』であり、『通俗』が参照された形跡は見られない。それにもかかわらず『絵本』二編の範囲にな

るとかえって『通俗』と一致するのは、自然に考えるならば、『縁起』を編んだ人物の手に『絵本』二編がなかった（刊行されていなかった、あるいは入手していなかった）ことを意味しているであろう。

ただし一方で、『縁起』が依拠したのが『絵本』初編と『通俗』二編、三編のみであったと考えることも、またできない。そのことを示すのが黄風怪の段の導入部である。孫悟空や猪八戒を見た村人が腰を抜かしたり、宿を借りた家で猪八戒が大飯を喰らったりするという、本筋とは関係ない箇所であるためか、この場面は『絵本』初編ではすっかり削除されている。ところが『縁起』には簡単な描かれている（一九丁ウゝ三十丁オ）。当然ながら『縁起』は『絵本』初編以外に拠っていることになる。この場面は『通俗』初編第二十回においては省略を施しつつも訳されているが、『縁起』との明らかな一致は見られず【14】、『縁起』は原作や『通俗』と細部においてかなり異なっている。『通俗』初編に自由な改編を加えたものである可能性が高いが、この箇所も含め、『縁起』の依拠した『西遊記』テキストについては、さらに慎重に検討する必要があるであろう。『縁起』が冒頭で取経の旅のいわれを述べる際に「抑モ其由來ヲ尋ルニ、凡ソ種々異説アリト云ヘトモ、今一説ヲ擧テ辯スルニ」（三丁オ）と語り起こす点も、依拠したテキストが複数であることを示唆しているかも知れない。

三 独自の特色

先に引いたように、『縁起』を紹介された太田氏は、その物語配列や筋の拙さを根拠として、この説教台本が『通俗』や『絵本』に拠ったものでないことは確実であると結論づけている。前節でみたように、訳文を仔細に検討するならば、『縁起』の訳文は部分的にせよ確実に『通俗』や『絵本』を襲っているのであるが、一方で『縁起』には確かに、『通俗』や『絵本』を参照していると俄かには信じ難いほどに『西遊記』とかけ離れた個所がある。

たとえば先に引用した表の「(27)蛇蝎に焼かれる」は、物語全体として『西遊記』に該当するものを見出せない例であるが（但し部分的に第十六回と一致する）、太田氏が既に詳しく紹介しているのでここでは触れない。大筋で物語が一致する場合でも、細かく文章を比較してみるならば、前節で行ったような字句の比較が成立する箇所は全体からみればむしろ稀で、既存の翻訳のみならず、いかなる『西遊記』テキストにも直接対応する箇所を見出せない部分が多い。冒頭近くから例を挙げるならば、三蔵が唐を出発する際に太宗がつけた二人の従者が万人力の護衛役であったこと、その二人の他にも多くの弟子たちがつき従ったが道半ばで力尽きたこと、双釵嶺に着いたのが十一月三日（この日付は判読しにくい）であったこと、そこで彼らを

襲った妖怪と護衛役二人が戦つて五、六匹を切り倒したと、捕えられた二人が順番に妖魔になぶり殺しにされる描写など、これらは何れも、『通俗』『絵本』を含め『西遊記』には見出されない個所である(四丁ウ〜五丁ウ)。

戦いや残酷な殺され方の描写などは説教を盛り上げるための潤色と説明づけられるかもしれないが、理解に苦しむ差異も存在する。高老荘で猪八戒を収める場面の訳文は、全体的に『絵本』初編によく一致し、その一端は前節でも挙げた如くであるが、なおかつ不可解な細部が見られる。この段の冒頭、三蔵と孫悟空は、高老人から猪八戒退治のために人を探せと命じられた高才という男に出くわして事情を聞く。そこで高才がいわく「是ヨリ東南ニ當テ賢徳山トテ一ツノ大山アリ、其處ニ一人ノ大仙アリ、故ニ夫ヲ招待シテ妖物ヲ生ケ捕シ爲メ只今參ル也」(二四丁オ)。いま知られる『西遊記』第十八回の原文では、呼びに行く人物は単に「好法師」とされるのみであり、山名はおろか東南という方角すらも、高才は口にしていない(当然『通俗』『絵本』にもない)。賢徳山の八仙なる人物はこの後いっさい物語に関わらないから、『縁起』がわざわざ付け足した理由は想像しにくい。方角や数字など、大筋に関係のない細部が変わっている個所は他にも見られる^[15]。

本書において中心人物として扱われる玄奘についての記述にも注目すべき点がある。まず、出発前の玄奘は『西遊記』では

洪福寺の僧ということになっているが、『縁起』では靈巖寺の住職とされている(四丁ウ)。靈巖寺は『太平広記』巻九十二「玄奘」項が引くいわゆる摩頂松故事の舞台であり、この寺名はそこに由来するのであろう。洪福寺は『縁起』では施餓鬼の法要が行われた寺(『西遊記』では化生寺)になっている。また、沙悟浄が首にかける今までに食った取経僧たちの九つの鬚髯を、『縁起』が玄奘の前世であると明記することも興味深い(二四丁オ、三五丁オ)。この設定は『西遊記』には見られないもので、却つて宋代の『大唐三蔵取経詩話』において、深沙神(沙悟浄の原型)が玄奘の前世を二度食べ鬚髯を袋に入れていることなどに合致する^[16]。もつとも、『西遊記』において三蔵はしばしば「十世修行」と形容され^[17]、『縁起』でもこの表現は用いられるので^[18]、そこからの連想で改編した結果、いわば先祖返りを起こしたとも考えられる。

さらに本書全体を貫く特徴としては、『西遊記』で三蔵の跨る龍の化けた馬が一度も登場しない点が挙げられる。この点について太田氏は前掲論文初出時に「本書の原本に竜馬は無かったものである」と述べている(『西遊記の研究』に同論文が収められる際にこの一文は削除された)。「原本」の問題はさておくとして、この決して短くない書物のなかに一度として龍馬が登場しないことは、やはり注意されなければならない。太田氏が指摘したように龍馬を収服する場面や龍馬が活躍する場面が見

られないのみでなく、『西遊記』が龍馬に触れるあらゆる細部から、『縁起』では龍馬の姿が消えている。三蔵の移動方法についても「足モ血鹽ニソミ乍ラ」(三三丁ウ)、「一ト足ツ、タトリノデ」(四七丁ウ)、「歩行シ玉フ」(八二丁ウ)などと述べられ、徒歩での移動が強調されている。『縁起』が参照した『絵本』や『通俗』には当然龍馬が登場するので、龍馬の不在は、何らかの「原本」を反映しているのではなく、『縁起』成立過程における改編の結果と考えるべきであろう。必ずしも主要でないとはいえ、旅の一員として多くの場面に登場するキャラクターを跡形もなく消してしまうという措置の背景には、『縁起』の訳者ないし編者の強い意向がうかがえる。あるいは説教を聞く信徒に對し旅の労苦を印象づけようとの配慮に出たものかとも思われるが、この点は検討課題としたい。

おわりに

以上、主として『西遊記』研究の見地から本書の位置づけを述べたが、『通俗西遊記』や『絵本西遊記』の刊行により我が国に流布した小説『西遊記』が、寺院に集う信徒に向けての説教台本として早い時期に改編されていたことは、この作品の普遍的生命力を物語ると同時に、我が国における中国小説の大衆的受容の一面としてもまことに興味深い。

龍谷大学図書館には、貴重な資料の閲覧と翻刻ならびに書影

の掲載を御許可いただいた。また、真宗史を専門とされる神奈川県立茅ヶ崎高等学校の塩谷菊美氏の御協力を得られたおかげで、多くの誤りを正すことができた。他にも多くの方々から親切な御助言を頂戴した。この場を借りて深く御礼申し上げたい。ただし、すべての誤りの責任が翻刻者にあることは言うまでもない。

(附記)

本書の現所蔵が知られるのはここで扱う龍谷大学の一本だけであるが、本書を連想させる題名の書物が、かつて東京神田の東城書店の目録に掲載されたことを、磯部彰氏に御教示いただいた。同書店に問い合わせたところ、「玄奘三蔵ミヤ唐天記 片カナ交ジリ写本、天保二年写、孫悟空等西遊記の抄本」という記録が残っている旨を教えてくださいました。この場をお借りして、磯部氏と東城書店に感謝申し上げます。この本は未調査にとどまっている。

注

【1】太田辰夫「《玄奘三蔵渡天由来縁起》と《西遊記》の「古本」」(『神戶大学論叢』十八卷一号、一九六七)。

【2】太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四)。

【3】Glen Dudridge, *The Hsi-yu chi: A Study of Antecedents to the*

Sixteenth-Century Chinese Novel (Cambridge, England: Cambridge University Press, 1970), pp.99-100.

- 【4】『朝日新聞社創刊120周年記念特別展 西遊記のシルクロード』『藏法師の道』図録』（朝日新聞社、一九九〇）。
- 【5】檀原市立図書館蔵『天理図書館所蔵耳成村地区散在文書（写真本）一』による。同書の目次によれば、天理図書館蔵本は昭和初期の転写本という。
- 【6】『角川日本地名大辞典 二九 奈良県』（角川書店、一九九〇）、「耳成」項。
- 【7】近世における真宗の説教や説教台本については関山和夫『説教の歴史的研究』（法蔵館、一九七三）、三二八〜三三五頁や、同『説教の歴史』（岩波新書、一九七九）一六五〜一七五頁に詳しい。なお二〇〇八年に節談説教研究会の機関誌『節談説教』が創刊された。
- 【8】磯部彰『西遊記「受容史の研究」』（多賀出版、一九九五）第Ⅱ部第五章「日本国における『西遊記』の受容」。なおこの方面の先駆的研究として鳥居久靖「わが国に於ける『西遊記』の流行―書誌的に見たる―」（『天理大学学報』第十九集、一九五五）がある。
- 【9】引用は、同書を翻刻した『絵本西遊記』（莫文会刊、一九一〇〜一九一〇）により、適宜句読点を施した。以下同じ。
- 【10】引用は『近世白話小説翻訳集』第十二〜十三卷（汲古書院、一九八七〜一九八八）に収める影印により、適宜句読点を施した。以下同じ。
- 【11】『西遊証道書』によった『古本小説集成』に収められる内閣文庫所

蔵本の影印を使用。上海古籍出版社、一九九二）。『通俗西遊記』初編の依拠したテキストは、磯部氏によると『西遊証道書』から通行の十卷本『西遊真詮』が生まれる間に位置していたかなりの善本、しかも稀覯に属する版本）であつたらしい（前掲書三三六頁）。この猪八戒のセリフは『西遊証道書』にあつて十卷本『西遊真詮』（東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫所蔵の懷新樓刊本による）には見られない個所である。

十卷本『西遊真詮』については、太田辰夫『西遊証道書』考」（『神戸外大論叢』二十一巻五号）の付論を参照。

【12】早稲田大学図書館所蔵の『絵本西遊記』がインターネット上で公開されているので、当該個所のアドレスを掲げる（最終アクセス日、二〇〇九年三月三十日）。

http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he21/he21_02500/he21_02500_0009/he21_02500_0009.p0007.jpg

【13】『縁起』では隆伯欽と表記される。

【14】二人の老人 アツサ ヲシノカント竹 タケシヤウキ 牀一腰 コシ ヲカケ（『通俗』

第二十回）、「人々老若男女暑サ凌キニ床几ニヨリカカリ」（『縁起』二十九丁ウ）の「暑さしのぎに」という表現は、原作には存在しない言葉であり『西遊証道書』では「一老者斜倚竹床之上」、二つのテキスト間の継承関係を疑わせるが、見られるように、この個所でも両者は主語が異なっている。前後の訳文も一致しないため、確証とはしがたい。

【15】たとえば『西遊証道書』において、黒風山は観音院の南に二十里行つたところにある（第十六回）。『縁起』においては北に百里となつてお

り、方角距離ともに異なっている（二六丁ウ）。

【16】同様の話柄は早い時期に日本にも伝わっていた。詳しくは磯部氏前掲書を参照。また、世徳堂刊本より古い西遊記物語を反映するといわれる戯曲『楊東来先生批評西遊記』においても、沙和尚は取経僧を九世にわたり九度喰ったことになっている。

【17】謝明勲「百回本《西遊記》之唐僧「十世修行」説考論」《古典小説與民間文学―故事研究論集》大安出版社、二〇〇四所収。

【18】五二丁ウ、五八丁ウ、六十丁オ、七二丁ウ、七八丁ウ、八二丁オ。

凡例

一、龍谷大学図書館所蔵『玄奘三蔵渡天由来縁起』（写本、一冊）を翻刻する。

一、漢字は原則として正字に統一した。合字や略字はそのまま翻刻せず、すべて通常の表記に改めた。

一、句読点を補った。返り点や振り仮名の類は原文の通り翻刻した。

一、底本の改行にはとらわれず追い込んだ。改面、改丁箇所は、たとえば「一丁表を」（一オ）、「一丁裏を」（一ウ）の如く示した。

一、脱落や誤写が疑われる箇所は、原則として訂正を行わず（ママ）と傍記した。必要な場合には注を施した。

一、■は虫食いなどによる底本の破損箇所、□は判読困難な文字を示す。

一、○は底本にある段落を示す符号であるが、○のなかに二から十二までの漢数字がある場合とない場合とがあるため、通し番号を洋数字で別に示した（太田辰夫氏による通し番号と一致する。解題参照）。漢数字がある場合には〇（二）の如く示し、漢数字がない場合には〇（2）の如く示す。

玄渡記 上 和淨 眞量 (一オ) (一)

玄奘三藏渡天由來緣起 無耳山 眞量寫

抑モ玄奘渡天ノ由來ヲ尋ヌルニ、先玄奘ト申スハ父ハ海州陳光蕊
 【2】ト申シ母ハ殷【3】開山温嬌ト云人ナルカ、容子在テ生レ
 落也。團ハ舟ニ乗セラレ海上ニ流サレケル。爾ル處漸々金山寺
 ノ邊リニ流レ付、幸ニ金山寺ノ長老法名^(マ)和尚ニ助ケラレ成人
 シテ、十八才ノトキ剃髮シテ法名ヲ玄奘ト名ク。然ルニ玄奘ハ
 元來西方金蟬長老ノ化身ニテ大權ノ聖者也。故ニ道德賢明天下
 ニ并フモノモナク、依之今度唐ノ貞觀十三年秋八月ノ頃口、大
 宗皇帝ノ勅ヲ受ケ長安ノ都^(マ)ニ洪福寺ヲ出立シテ遙ニ十萬八千
 里ノ天竺ヘ御經ヲ求メニユカレタトアル。抑モ其由來ヲ尋ルニ、
 凡ソ種々異說アリト云ヘトモ、今一說ヲ擧テ辯スルニ、彼唐シ
 長安ノ都テ【4】帝太宗皇帝ト申スハ、十善萬乘ノ天子ノ御身ナ
 レハ、何事ニテモ不足ノナキ御身ト云ヘ乍ラ【5】、鬼デモ遁レ
 カタキハ無常也、終ニ唐ノ貞觀十三年ノ夏ノ初、不圖御大病ニ
 本付玉ヒ、醫藥ノ力ヲモ及ハス空ク一命終リ玉フ。然ル處ニ不
 計冥途黃泉ノ旅ニ赴キ、閻魔ノ廟ニ引出サレ、段々善惡ニ業調
 ヘ玉フニ、唯ノ一ツモ善根ナシ、剩ヘ惡劫ノ惡業因ハ海山ニモ
 スキタリ。依テ彌々罪科究ル上ハ大焦熱地獄ニ墮在スヘキヨシ
 獄卒ニ命シ玉ヘハ、太宗モ涙ニクレ玉ヘトモ、情ナクモ獄卒ト

モ鐵刃ニ引カケ大焦熱地獄ノ釜ノ中ヘ投ケ込ントスル處ニ、不
 シキヤ六道ノ教主地藏菩薩カ顯レ、涙タ乍ラニ大王ヘ願ヒ玉フ
 ハ、此者ハ唐シ四百餘州ノ主シ、彼レ一人助ケ返シナハ千萬無
 量ノ衆生佛道ヲ參シ成佛スヘキ間タ、御慈悲ニ且ク命ヲ延シ許
 シ玉ヘト願ヒ玉フ。大王聊カ聞届ケ玉ハス、壽命盡罪業究ル上
 ハ是非墮在スヘシト命シ玉フ。然レトモ【三オ】地藏菩薩又候
 押返シ、左アル事ナラ何卒廿年ノ間タ命ヲ延シ玉ハレカシ、其
 間タハ吾身ヲ彼カ名代ニ苦ヲ受ケ申サン、是非許シ玉ヘト願
 玉ヘハ、大王モ是非ナク御聞届ケアラセラレ、依テ地藏御身ヲ
 分ケ玉ヘ、身^(マ)ハ太宗ヲ引連レ御門前ヘ出テ玉ヘ、一身ハ悲シ
 ヤナア、獄卒ノ鐵棒ノ先ニ引カケラレ、焰々トモヘ上ル大焦
 熱地獄ノ釜ノ中ヘ投ケ込レ玉ヘタトアル。何トマア恐レ多ヒ事
 テハナヒカ。併シ乍ラ昔シノ皇帝斗リニ非ス今日ノ我等モ何程
 コソハスル御苦勞ヲ彼方々ニカケタテ有フ。然ル處ニ太宗ハ地
 藏菩薩ニ手ヲ引レ、忝ナヒヤラ嬉ヤラ恐レ多ヒヤラ云ニ言ハモ
 ナク、涙タ乍ラニ閻魔ノ御門前ヘ出テ、夫ヨリ廣々トシタ野原
 ヲ通り追々タル谷峰ヲスキ、菩薩ヲカラニ道ヲタトルニ、不シ
 キヤナア、向ウ遙^(マ)ルニ一面ノ煙リ立チ上ルカト思フ也、其
 中ヨリ無量ノ恐キ餓鬼共カ顯レ、眼ヲ瞋シ齒ヲカミナラシ
 大手ヲ振上、鳥ノ如クニ走り來レハ、皇帝ヲ白眼ミ付ケ、ヤア
 大王克ク聞玉ヘ、吾等コソハ君ノ國中ニ住シ民百姓ナルカ、
 君佛法ト云コトヲ尊敬セス、依テ弘ル人モナシ。此故ニ我等邪

見ニ暮シ、今斯ル餓鬼ノ身トナリ、飢渴ノ苦シミ心モ言モタヘタリ、依テ恨ミ晴シニ君ノ體ヲ引サキ各々食テ恨ミヲハラサント存ス、イサ者共サアカ、レト眞先ニ進タ餓鬼、皇帝ニセカミ付引サカントス。大^マ宗御心ロノ中チノ恐シサ申ス斗リモアラハコソ、惣身ヨリ玉ノ様ナル油ヲ流シ、菩薩ニセカミ付玉ヘタトアル。何ト同行中恐シコトテハナヒカ、マダノ昔ノ太宗皇帝ハ后ロニ地藏サマカ御サル故ニセカミ付キ玉ヲ張合モアリタカ、今座ノ各々ヤ我々左様ナセカミ付菩薩ハ傍ニ在スマヒシ、是非モナクノ牛頭馬頭ノ手ニ渡ル等。○(2)扱申シカケタル玄渡天ノ一段』(三ウ)然ル處ニ地藏菩薩、御慈悲ノ御手ニ皇帝ヲ引抱ヘ玉ヘ、柔軟ノ御影ノ袖ヲフリ上ケ玉ヘ、取付餓鬼ヲ追ヒ拂ハレ、如何ニ餓鬼共ヨク聞ケ、汝ラカ恨ミ尤モナレトモ唯今此大王ヲ抓ミ刻キ思ノ儘ニ喰タ處カ、罪業益々盛ニナリ苦ミニノ否ヤマスハカリ。然ルニ今閻魔大王ヨリ此皇帝ヲ貰ヒ受ケ返リシナラハ、娑婆ヘ返ル也爲ニ汝等大法會ヲ營ミ、其ノ苦ミヲ遁テ下サル程ニ、又タ其元共ノ子孫マテ佛道修行シテ未來ハ共々ニ此苦ヲ遁レ善處ニ赴ク一ツ蓮スノ樂ミヲ受ケサセシ間タ、早ヤノ退キ申セヨト菩薩餓鬼共ニ命シ玉ヘケレハ、立處ニミナノ消失タトアル。依テ菩薩太宗ニノ玉フハ、汝チ娑婆ニ返ラハ施餓鬼ノ大會ヲ行ヒ自身モ佛法ヲ信シ國中ニモ厚ク佛法ヲ弘ムヘシト念頃ニ仰セラレハ、皇帝モ涙ニムセビ音モ惜マス泣キ玉ヘシト思ヒシニ、アラ不シキヤ夢ノ覺メタ如ク蘇生

シ玉ヘタトアル。于時夫扱テ置キ太宗皇帝ノ御殿ニハ、御崩御ノコトユヘニ皇妃女后ノ御嘆キハ申スニ不^レ及、百官百司ニ至ルマテ涙タ^袖ヲ絞ラサルモノモナク、去乍ラ嘆テ甲斐ナキ娑婆ノ習ヒナレハ、是非ナク金棺ヲ調ヘ御葬式ノ御用意アリト云ヘトモ、御尊體ノ胸^キ中暖ナル故心口元トナク、御送りノ儀ハ且ク御見合セアリケルニ、不シキヤ大王息ツキ玉ヘ水ヲノト呼玉ヘハ、上下ノ一統打驚キ玉ヒ、ソレヤコソ大王蘇リ玉ヒシソト喜ビ勇ミ、藥ヨ水ヨト御介抱申シ上ルニ、段々正氣ヲ得玉フニ順ヒ、右キ迷途ノ旅ノ御物語遊ハシケレハ、何ツレモノ初メテ后生ト云コトヲ思ヒ知リ、一大事ハ佛道也ト皆々一統修シ玉ヘタトアル。扱テ夫ヨリ日ヲ經テ大王御全快在シ、菩薩ノ教ヲ堅ク守リ佛法ヲ信シ、國中ニ触レテ邪見ヲ戒メ佛法聞信遊シ玉ヘ、尚ヲマタ菩薩ノ仰セノ如ク冥途ノ餓鬼ノ(四オ)爲ニ千人ノ大衆ヲ招待シ、其トキ靈巖寺ノ住職玄奘法師生年廿七才也、是ヲ導師ト御頼ミナサレ、洪福寺ニ於テ七日七夜ノ施餓鬼ノ大法事力勤タトアル。爾ル處ニ首尾能施餓鬼ノ法事打濟ケレハ、太宗皇帝ノ詔リトシテ未タ天竺ヨリ大乘甚深ノ法門唐^マヒ渡ラサル、爾ヲ何卒渡シ度ト思召、誰レ彼レト其仁ヲ選ヒ玉フニ、中々容易カラサル御用、殊ニ道無キ虎狼妖怪ノ難處ヲ越ヘテ行フト云事故ニ、誰有テ請合モノモナク、其トキ玄奘三藏獨リハ御承ケ申シ、十萬八千里ノ難處ヲモ恐レス天竺ヘ御渡リ遊スト云事ニ成タ。何ト銘々百里ノ御本山ヘ參ルサヘ障リ荒^マレヤ、若モ追

剝病犬澤山ト聞タナラハ受合モノハアルマヒニ、好フコソ／＼
十萬八千里ノ天竺、虎狼化ケモノ、中カラモ厭ハス御渡リナサ
レタモノチヤ。夫ヲ思ヘハ一句ノ法モ化タヤ（マヤ）愚カニハ聞レヌ
コトチヤゾヨ。○（3）然ル處ニ斯ル遠處、殊ニ虎狼妖怪ノ其中
ヲ行玉フ事故道中モ覺束ナク、依テ道案内ニ大力ノモノヲ添シ
トアテ、百人力アルモノヲ百公ト云ヒ、千人力アルモノヲ千公
ト云ヒ、萬人力アルモノヲ萬公ト云、其萬公ヲ二人リ（マヤ）誓固ノ
役ト相添ヘ玉ヒ、彌ヨ長安ノ都ノ靈巖寺ヲ御出立在シレケレハ、
御弟子中モ見送リ中ニモ同道ノ志シアテ御供申サレタル御方モ
アリケレトモ、廿日卅日ノ間タニ往キ勞レ皆々御死去ナサレ、
玄奘ト萬公二人リト三人連レ、路モナキ山河溪谷、方角當ニ天
竺ノ道ニト赴キ玉ヘタトアル。爾（マヤ）ル玄奘數日ヲ重ネ、唐シノ
西シ境ヒ河州ノ地ニ着キ福原寺ニ一宿シ玉ヘ、夫ヨリハ野ニ伏
シ山ニ伏シ艱難辛勞ノ數ソヘ難シト云ヘトモ、夫ヲモ厭ハス赴
キ玉フニ、既ニ時移テ早ヤ十一月モ三日【6】トナリシカハ、一
ツノ高山ヲ見カケ漸々雪フミ分ケテ登リ玉フニ、何ヤラスヤラ
頂ヘ上リ玉ヒ、ヤレ嬉シヤトニタ足ニ足シ行キ（四ウ）玉フ也、
其儘三人一同ニツノ穴ヘ落チサセラレ、ヤレ情ケナヤト驚キ
見玉フニ穴ノ深キ事三間餘リ、實ニ屏風ヲ立タル如ク、云何シ
テ上ル手術モナク、三人トモニ只忙然トシテ在シタル處ヘ、
忽然ト穴ノ奥ニテ物音アリ、トヤ／＼ト出タル處、異類異形ノ
妖モノ共五六十ホト來リ三人ノ白眼付タル其分野、身ノ毛モ

堅立ツ斗リ也。漸クアルト奥ヨリ天地モ響ク大聲ニテ、早ク夫
ヲカラメ取テ來レ、酒ノ肴ニセント呼ハリケレハ、五六十斗
リノ妖物一同ニ三人ノカラメトラントスル處、二人ノ萬公ハ
一生懸命此トキ也ト三尺二寸ノ大劔ヲ抜ク手モ見セス、手元ト
ニ寄ル奴ツハラ五六足斗リヲ切り倒スト云ヘトモ、何シテ大勢
ニ手ナシトヤラ、遂ニ三人共ニ高小手ニ戒メラレ、手足ヲシ
バリ大將ノ前ヘ引出ス。爾ニ其マア大將ノアリサマ、眼コノ
光リハ日月ノ如ク口チハ耳迄サケ上リ、白キ齒（キハ）出シタル事
劔ヲ立タルカ如ク三面六臂ノ鬼神、且クスル内チ熊山君、特處
士、只今參上ト名ノリテクルニ足ノ鬼神、否ヤ最フ肝モ魂モ消
入ルハカリ、左右ニ列ナル五六十足ノ妖物、心モ語モ斷ヘ果
テ、泣ヨリ外ノ事ハナシ。爾ル處ニ大將鬼神玄奘ヲ白眼ミ、汝
ハ云何ナルモノソヤト。玄奘涙ヲ拂ヒ、我レハ唐シ太宗皇帝ノ
勅ヲ受ケ天竺ヘ御經ヲ求メニ參ル玄奘ト云モノ也、悲クモ斯ル
苦難ニ値ヘリ、平ニ免シ玉ヘト泣キ入ラセ玉ヘタレハ、彼ノ大
將重テ右二人ノ萬公ヲ白眼ミ、扱々惡キ奴原哉、最前吾力手下
ヲイタメタル赴キ重々恨アル徒者、キヤツラヲ酒ト肴ニ調ヘ、
幸ヒ御客モアル事ナレハ思ノ儘ニ苦メテ、殺サレタル手下ノ者
ノ恨ヲハラセヨト下知ヲナシケレハ、心得タリト彼ノ妖物共庖
丁、切盤、生膾箸、丁子、德利、手桶、夫々料理ノ道具ヲ持來
リ、悲哉（五オ）ヤ一人ノ萬公ヲ引トラヘ兩手兩足首筋押ヘ付
ケ、大ナ切盤ノ上ニテ體中ノ肉處ヲ庖丁ニテ身下ロシヲスル。

其分野、左ノ料理屋ノ亭主カ撮身ヲ造ルカ如ク、一ト庖丁
／＼キヤツキヤ／＼ト苦ム聲、傍ニ詠メテ在ス玄奘ヤマタ一人
ノ萬公ハ吾身モ今マ早ヤ彼如ク責苦ヲ受ルノト思召セハ泣ヨリ
外ハナキ、哀レトモ／＼地獄ノ責ヲ見ルカ如クテ有タト、其后
歸朝ノ時ノ御物語リ也。何ト同行中、斯ル御苦勞御難儀ヲ御渡
シ下サレタ御経、今日只今疊ノ上テ樂々膝甲斐布キ乍ラ十一分
ニ聞カセテ下サル、朝ナタナノ御教化ヲ、ソウラク半分ニ居眠
リタラケテ聞ナストハ餘リ／＼淺間布／＼。○(二一四)サテ辯
シカケタル玄奘渡天ノ由來、夫ヨリ又タ獨リノ萬公ヲ引キスヘ、
今度ハ先初ニ片腕ヲ引キ抜キ夫ヨリシホリテ血ヲ出シ、又タ片
手兩足胴體抓ミ潰^{ツツ}テ血ヲシナル處、其マア息ノ切ル、マテノ苦
ム分野、肝モ魂モ消ヘル斗リ。其管チヤ、僅カアヤマチシテ手
足ノ骨ノカミ違フタノヲ医者カ療治スルサヘキヤツキヤ／＼ト
云。小氣ナモノ／＼絶氣スル位也、況ヤ臨時ノ間ニ五尺ノ體タ
ヲモミ潰サル、事チヤモノ、云ハイテモ知レタコト、爾ルニ次
ハ玄奘、ア、今ハ我身彼ノ分野ニナル事ノ悲シヤ、死タル命チ
ハ是非モナケレト、切角是迄數百里ノ難處ヲ越ヘ來リ乍ラ天竺
ノ地モフマス空ク妖怪ノ爲ニ一命ヲ果ス事ノ無念サヨト一心ニ
佛道ヲ念シ居玉ヘケルニ、彼五六十足斗リノ妖物共、右料理致
シタ二人ノ血肉ヲ大將ノ前ヘ備ヘケレハ、大將笑ミヲ含ミ、扱
テ思ヒヨラサル天ヨリノ賜リモノ、久サ／＼喰ハサル好肉ヲ喰
事ノ珍シサヨト、熊山君、特處士并ニ幕下ノ妖共トウタヘタワ

ムレ、右ノ酒肉ヲ飲ミ喰ヘ、何レモ／＼氣嫌能キ風情ニテ、奥
ノ一ト(五ウ)間ニ入タトアル。爾ルニ玄奘ハ暫ク彼レヲカ
チヲ遁ルト云ヘトモ、間タモナク我モ喰ハル、テ有フ、ア、悲
シヤト雨モサメ／＼涙ニムセヒ玉ヘケルニ、不シキヤ一人白髮
ノ老翁來リ、今汝チヲ助ケニ來リ、必ス恐ル、事ナカレト、彼
ノ繫キシ繩ヲトキ、玄奘ヲ小脇ニカヒ挟ミ鳥ノ立如ク穴ノ上ヘ
ト飛上リ告玉フハ、此處ハ雙嶺^{ツツ}ト申シテ虎狼ノ住家也、穴ノ
大將ハ寅^{ツツ}將軍ト虎ノ化タノ也、外柄來タ熊山君ト云クロキ化
者ハ熊ノ精也、特處士ト云骨合ヒノ延タ者ハ羊シノ化タノ、爾
ルニ今汝ヲ哀ミ愛ニ來レリ我レハ即チ大白^{ツツ}辰^{ツツ}星也、長ク御
身ニソフテ守リ申サン。兎ニモ角ニモ佛道修行怠ラス首尾能ク
天竺ヘ御渡リ玉ヘトノ玉フカト思フ也、虚空ヲサシテ飛去リ玉
フ。玄奘ハ覺タル心地シテ其后ヲ伏シ拜ミ／＼、心口細クモ只
獨リ西ヲサシテ歩ミ玉フ。暫ク道ヲタトリ玉フ處ニ、前ヨリ一
足ノ虎爪ヲ磨テカケ來リ、ウナル聲ノスサマシサ、是ハト驚キ
后ヘ退キ玉ヘハ、跡ヨリ甘尋ロ斗リノ大蛇、口ヲ開キ日月増
シタル眼ヲムキ出シ玄奘ヲ白眼ミ追來ル。如何ナ玄奘モ前ハ虎
後ハ大蛇、逃ルニ道ハナシ、必死ト心ヲ究メ足モ腰モ拔ル思ヘ、
クシヤリト大地ニマロヒ玉フニ、不シキヤ彼ノ虎モ大蛇モ一參
ニ谷間ヲサシテ逃サル。其處テ玄奘はハ云何合點ユカヌト思フ
テ御サル。其處程山ノ峰ヨリ鳥ノ飛カ如ク一人ノ大ナ男コ腰ニ
ハ長キ劔キヲ帶シ手ニハ弓筈ヲ携サヘ玄奘ノ前ヘト走り來ル。

夫處テ三藏、扱々迎テモ遁レヌ我運命、早ヤ／＼命終テクレ、又タソロ此世ヘ生レ出テ思ノ儘ニ御經ヲ渡サヌモノヲト思召シ涙乍ラニ仰ルハ、ヤア／＼汝チ我コソ唐シ太^{（六才）}宗皇帝ノ勅ヲ受ケ天竺ヘ御經求メニ參ル玄奘ト云モノ也。運命今盡キ汝カ手ニカカル、害スルナラハ急キ害セヨ、覺悟致セシ上ナレハ恨ミハ更ナキ程ニトノ玉ヘハ、彼男コカラ／＼ト打笑ヒ、御僧恐レ玉フ事ナカレ、左様ナル邪見ナモノニ非ス、某シハ隆白欽トテ此邊ニ住ム獵人也、此傍ニ住ム妖怪怪化モノ、類ハ如何ナル者テモ我レ一ト目白眼ツケレハタ、ノ一ツモタ、スムモノナシ、ミナ悉ク恐テ逃ケ去リマス。某シ最前山上ニテ見受マス處、前ヨリ虎後ヨリ大蛇追來リ御僧ヲ害セント致ス故ニ、御愛ヒト思フコ、ロヨリ、峰ニテ彼レヲ白眼ミ付ケレハ、我レニ恐レテ谷間ヘ逃ケ行キタリ。必ス／＼恐レ玉フ事勿レ。今宵ハ何分吾家ニ往キ一宿疲レヲ直シユル／＼發足シ玉フヘシト申シアケレハ、玄奘ハ地獄テ佛ケトヤラ、只其男ニ取ツキ力ラ便利トシテ喜ヒ玉ヘタアル。サア各々此娑婆テサヘマサカノトキハカラニシ頼ミニスル、況ヤ我等未來ノ旅ニ於テオヤ。夫ヨリ玄奘彼ノ男ニ供ナレ其家ニ至リ玉フ。内ニハ獨リノ母親アリ。彼男申ニハ、今日此御僧ヲ虎ヤ大蛇力罷リ出テ既ニ喰トスルユヘニ愛シウ思ヘ、虎ヤ大蛇ヲ追ヒ拂ヒ御助ケ申シ、殊ニ天竺ヘ御經ヲ求ニ渡ルトノ御咄シ故、今^{（マ）}霄御宿メ申サフト存シ御供申シマシタ程ニ、母人御馳走ナサレテ下サレト云ヘハ、母ハ聞ヨ

リ夫ハ／＼御愛ヤ、先ツ／＼御上リ緩ルリト休足シ玉ヘ、幸明日ハ我夫トノ縁日、出家トアレハ求メテモ御招待申スヘキニ、不^レ計來リ玉フ事千萬嬉ヒコト也。サア／＼是レヘトノヘケレハ、玄奘モ親ニ逢タ心地シテ疲レヲ休メ玉ヒタトアル處ニ、老女事ノ子細ヲ呉レ／＼尋ルニツキ、三藏渡天ノ思出立テカラ發足ノトキハ多勢デアリケレトモ、皆相果テ、^{（六ウ）}残り三人、其中二人リハ个容／＼ノ妖ニ喰ハレ今ハ我レ獨リ、心口細クモ渡天ノ圖リト語リ玉ヘハ、老女モ共ニ涙ヲ流シ、扱々難有御身ノ上ト念頃ニイタハリケレハ、玄奘モ夜ト共ニ讀經シ、明ル日ニナレハ暇ヲ取テ出玉ヘハ、老女モ男コモナツカシケニ今日最一日休息シ玉ヘト止メケレハ、玄奘涙ヲコホシ、扱々念頃ナル親子ノ御心口、我レモ去リトハナツカシク、此末ヘ亦候云何ナル者ニコソ惱マサレ苦メラレヌ、夫ヲ思ヘハ身モチ、ム程ニ存スル故、最一晚モ止マリ度存スレトモ、我个様二十萬餘里ヲ厭ハス虎狼ノ難ヲモ願ス天竺ニ赴ントスル事、更々別ノ事ニ非ス、大唐日本ノ衆ノ衆生、濁惡邪見ニシテ大乘ノ法リヲ知ラス、空ク未來三惡道ニ落チ沈ミ、無量劫ニモ浮ム期ノナヒ苦ミノ身トナル事ヲ思ヘ出セハ、吾身ヲ切り刻クヨリモ不便ニ思ハレ、一日モ早ク天竺ニ渡リ大乘ノ法ヲ大唐日本ヘ渡シ、一切衆生ノ未來ヲ助ケ度候ト思ヘハ、吾身如何ナル難ヲウケ苦ム事モ打忘レ、一時モ早フ彼地ヘ渡リ度存スルト仰セラレ、暇乞ヲシ御發足在シタトアル。何ト同行中、玄奘ハカ、ル御身ノ難儀ヲ忘レ玉ヘ

涙々乍ラニ申シ上ル。玄奘モ不審乍ラ、汝チ申ス言ニ偽リナクハ、兎モ角モ計ヒ申サン、去乍ラ汝ハ斯ル大山ノ下ニ押サレテアル。我レ云何シテ汝ヲ救ヘ出ス仕方ナシト。猿ノ云ク、其儀ハ苦シカラス、此山ノ峰ニ一本ノ金字ノ札アリ、是サヘ取捨玉ヘハ我レ自ラ山ノ下ヨリ出マス、併シ乍ラ其トキハ此山鳴動致スヘキ間タ、右キ札ヲ取リ玉ハ、是ヨリ東ノ方ニ一ツノ平ラアリ、夫ニ一本ノ大竹^(マ)ヨリ、夫ニ必至ト取付テ在スヘシ、何程山谷鳴動ヘテモ御師匠ノ御身ニ障リナシト申シ上ルユヘ、夫ヨリ玄奘、伯欽トトモニ峰ニ登リミ玉ヘハ、彼カ言ニ違ヒナク、金字ニテ唵^{オン}嘛^マ呢^ニ叭^ハ咪^ミ吽^フノ六字ノ札アリ。玄奘、手ヲカケ取ラヌトシ玉ヘハ、其札自ラ天ヘ舞上ル。夫ヨリ一卷ニ玄奘モ伯欽モ右ノ大竹ノ處ヘ來リ玉フニ、不シキヤ大山一同ニ鳴渡リ、動キ^(マ)毘^(マ)クコト天^(マ)』(八才)地モ崩ル、カト思召處ニ、忽チ鳴動モ止ニケルニ、不シキヤ其丈ケ五丈斗リアル老猿ル、玄奘ノ御前ニ指ウツムキ種々ニ御禮申シ上ケ、彌御師弟ノ契約アリケレハ、重テ老猿ハ申ス様フ、最前申シ上ル通り我レハ孫悟空ト申シテ、須彌山ノ西平ラニ至リ、須菩提ノ祖師ニ順ヒ七十二通りノ變化ノ妙術ヲ習ヒ、剩ヘ龍宮城ヨリ求メ得タル如意金箍棒^{【10】}トテ、延ストキハ下界ヨリ非想天ノ頂キ迄テモ届キ、促ルトキハ一分カ二分ノ小棒トナシ^(マ)其^(マ)中ニ入レ置ク、神變不シキノ重寶處持仕レハ、恐クハ天地ノ間ニ我レカ恐レルモノトテハ一ツモナク、如何ナル鬼神亡靈妖怪ノ類テモ私シカ取テ伏センモノハ一品モ

ナク、今日ヨリハ御師匠サマニモ心細ク思召コトハ最フ御サリマセヌ。山ニ寄添フタ心地遊バシ道ヲタトリ玉ヘト丈夫ニ申上ケレハ、玄奘モ中半ハ信シ中半ハ否ラシク思召シテ吾ル處ヘ、何カ知レヌ惡風動クト谷間ヨリ吹來ルト思フ也、何フテ其大サ二丈ニ餘ル虎力一疋、牙ノ嚙ヲカミ鳴シ爪ヲ磨キ、玄奘ヲタ、一口チ喰ハント云勢ヒニテ飛來リ玄奘ニ飛ヒカ、ルヲ、孫悟空此ヲ見ルヨリ、ヤア——我師父恐レ玉フナト云ヨリ早ク、耳ノ中ヨリ右ノ金箍棒ヲ取リ出シツラリト引延シタル處ニ二丈餘リノ金棒トナシ、眞向微塵ニナレト彼ノ虎ヲナキ伏セケレハ、哀レナル哉、虎ハ眉間ノ眞^(マ)二ツニ打割レ、キヤアト云タカ浮世ノ相圖、タ、一ト打ニ打倒サレ息タヘタトアル。然ル處ニ、體タノ毛一ト筋抜キ息キ吹キカケル也、忽チ一ツノ小刀^{コカサ}トナル、夫ヲ以テ虎ノ皮ヲハキ取肉ヲ削リ落シ、我着物ニセント身ニマトヒ、右ノ金棒ヲ引促メ、元トノ如ク耳ノ穴ヘ押シ入レ、イサ御供申サント荷物ヲニナヘ立チ上レハ、^(ハウ)玄奘モ夢ノサメタル如ク、是レハ——如何ナル手強キ弟子ヲ求メシ事ソト山ニ寄リモタレタル心地ヲナサレ、喜ヒ——右伯欽ト御別ヲナサレ、天竺ノ道ヘト赴セラレタトアル。何ト玄奘モ是レマテハ便利カラト思召タ二人ノ萬公ハ妖怪ノ爲ニ命ヲ失フ、適マ——途中テ情ヲ受ケラレシ伯欽ハ是ヨリ末ハ行事叶ハヌト暇マヲ乞フ、ホンニ便リ連ナヒ御身ノ上ナレ■、斯ル大力神變不シキノ孫悟空ト云弟子ヲ求メ玉ヒタレハ、今ハ心ニカ、ル山ノ端モナク、心

ロ丈夫ニ安堵シテツト／＼彼地へ越へ玉フ。今準へテ思へハ、
 在座ノ我人生々世々ヨリ三世佛ノ御慈悲ニモレ、十方薩陀ニハ
 ウトミ果ラレ、未來ノ旅ニ赴へテモホンニ便リモカラモナク、
 彌ヨ地獄餓鬼畜生ノ火ノ坑ニ落チ入り鬼ノ金棒ノ下ニナリ、血
 ノ涙タコホスヨリ外ニ手ノナヒ御互ノ身ノ上也。(つづく)

注

- 【1】一丁ウならびに二丁両半葉は空白。
- 【2】底本は「必」と作るが、振仮名を勘案して改めた。
- 【3】底本の字形は判読し難いが、「殷」とあるべき個所である。
- 【4】「都テ」は、「都コノ」を写し誤ったものか。
- 【5】本書にはこの個所(云へ作ラ)のように「い」が「え」になる個所が多いが、すべて原文のまま翻刻した。同様の個所については以下一々注記しない。
- 【6】日付の判読は確かではない。底本では「壬二日」を押し潰したような字形となっている。
- 【7】底本は「噫咀」^{フツ}。直後に見える例も同じ。いま意を酌んで改めた。二六丁ウにも同じ地名が見られる。
- 【8】この二文字、あるいは「和淨」の誤写か。
- 【9】この個所は「孫悟空」となっているが、以下「悟」を「吾」に作る個所もある。ただし、それらは本書に頻出する省略の一種とみなし、この翻刻ではすべて「悟」に統一した。

- 【10】ここで「籊」と読んだ字は、実際には「籊」から竹冠を除いたような字形であるが、二四丁ウでは竹冠のついた「籊」字を用いているので、すべて「籊」に統一した。